

月の花挽歌 ～5.裸のマハ～

5-19

越前ガニの解禁日の十二日後になる、十一月十八日土曜日の早朝に出発した。

真紀の運転するオーディィTTクーペは関越道練馬→藤岡ジャンクションで上信越道を経て上越ジャンクション→北陸道武生までのおよそ五百kmを七時間ほどかけて走破した。

横田は初めて描いた裸婦像に、画家としての確かな感触をとらえていたのか、助手席のシートにもたれて、珍しく饒舌であった。

二人の会話がしばらく途切れて、所沢を過ぎたあたりで、「淡谷のり子の裸婦像を観たことは……？」と横田は話題を変えて尋ねてきた。

「歌手の淡谷のり子さんのことですか」

「うん、ブルースの女王と呼ばれた……」

「観たことはありませんが、言われてみれば確かに、何となく聞き覚えがあります」と答えた真紀は、テレビで知っている彼女と裸婦像とが今一つしっくりこなかつた。

時速百キロ越えの走行音もエンジン音も静粛性の高いオーディィTTクーペ2・0TF S Iクワトロの車内は静かで快適だった。

「彼女が音大で音楽の勉強をしていた時に、モデルのアルバイトをしていたことは？」

「思い出しました。裸婦像を描いた画家さんに強姦されたって話」と真紀は言ってしまったから、なぜか知らないけれど、気まずい思いでハンドルを握っていた。

「その画家は、芸大の先輩なんだ。と言っても時代が違うけどね」と横田は深く倒してあったリクライニングシートを起こすと、真紀の膝に手の平を添えて言った。

完成祝いを兼ねた小旅行なのに、この人は何を言おうとしているのだろうと、不快感が湧いてきた真紀は、しばらく黙り込んだ。

「そんな怖い顔をしないでくれないか。ほらほら、スピードの出しすぎだよ」と横田は諭すように話しかけた。「昭和の初めの話だから、気楽に聞いてほしいんだ。その画家・田口省吾は良家の息子でね、苦学生の彼女を経済的面で支えてやっていたし、結婚まで考えるほど惚れていたのだが、魔が差したのだろうか、アトリエでポーズをとる彼女にいきなり襲いかかり強姦してしまったそうだ。その後五十年ほど過ぎてから、彼女が女流作家の取材に応じて、真実を明かした事により、世間に流布してしまった。これが事の顛末なんだがね、彼も適当に女遊びをしていれば、こうはならなかったと思う。その日を境に、彼女はアトリエに行かなくなったそうだ。事件の翌年から三年間、彼はパリ留学をすることになるので、よほど応えたのだろう」